今、会いたい

私には、八年ほど前から、ずっと会いたい人がいます。それは、中学三年の時の同級生、ツヨシとサトシ（仮名）の二人です。なぜ二人に会いたいのか、その理由についてお話しします。

二人との出会い





私は、中学三年の時に、父の転勤により引っ越しをしました。当時はよくわかっていませんでしたが、そこは同和地区でした。二人との出会いは、この地区で行われている勉強会に参加したことから始まります。

先生から誘われ、放課後の勉強会に参加することにしました。その勉強会では、差別や人権に関する学習もありました。その時に出会ったのが、ツヨシとサトシでした。

いつも一緒にいて、面白おかしい話をすることが多い二人ですが、差別や人権について学ぶ時は、真剣な顔つきで話す姿を今でも思い出します。二人にとって、とても大事なことなのだろうと感じていましたが、私にとってもこの人権学習が、社会の状況や人権問題についてじっくり考えることができるとても貴重な時間でした。

私は、夏休みにサトシの家に遊びに行ったことがあります。その時、サトシのお母さんとおばあさんから、笑顔で、

「仲良くしてね。」

と言われました。『もちろん、友達だから！』と心の中で思っていましたが、今ふり返ると、もっと深い意味があったことが分かります。

高校は別々でしたが、年に数回会っていろいろなことを話す大切な友達でした。しかし高校卒業後、連絡をとることもなくなっていきました。

忘れられない事件

私が教員になり、同和地区のある学校に赴任した時、地区の人と話をするようになりました。高齢者の方から、「おなかが減っとらんね？」とか「元気にしとるね」といつも声をかけてもらい、あたたかさと優しさにふれることがよくありました。また部落差別について学習するにつれて、絶対に無くさなければならないという思いが強くなり、あの時の二人と同じように真剣に授業に取り組みました。

そんな時に起こったのが、市内の公共施設での※差別落書き事件です。

その落書きを見た瞬間、幼いころの被差別体験を昨日のことのように思い出して悲しみ、怒る顔がいくつも浮かび上がってきました。子どもから高齢者まで集まって、自分たちの思いを出し合う姿を、私は今でもはっきり覚えています。

同時に、数十年ぶりにツヨシとサトシの顔を思い出しました。「二人が同じように差別に苦しんでいないだろうか。」「二人がこのことを知ったらどう思うだろうか。」など、さまざまな思いがめぐってきました。そして、差別落書きを目の当りにして、中学の時に人権学習を真剣にしていた意味や、サトシのお母さんたちが言った「仲良くしてね。」の言葉の重さが痛いほど分かりました。そこには、部落差別に立ち向かい、命を大切にし、差別をなくす人になって欲しいという願いや、被差別の側に立って、私たちの子や孫をしっかり支える友達になって欲しいという思いがあったのです。

私は二人に会って、差別は絶対許さないという気持ちをぜひ伝えたいと思うのです。

※「市内公共施設への許されない差別落書き」については、下記のコードで読み取ってください。筑紫野市ホームページに掲載の「解放への一歩」の第46集7・8ページに詳しく記載があります。

ツヨシ、サトシ、元気にしていますか。突然の手紙で驚かれていることと思います。

私は、教師になりました。縁あって、中学生の時に二人に出会えたことの感謝の気持ちをどうしても伝えたくてペンをとりました。

教師になって、同和問題を学び、同和地区の方々とも出会い、二人と出会った時と同じようなあたたかさと優しさを感じながら差別の現実から学び続けています。

そんな中で、校区の公共施設にいくつもの差別語や命を脅かす言葉を使った卑劣極まりない差別落書きがありました。地元の人たちの悲しみと憤りは筆舌に尽くしがたいものでした。その落書きを目の当りにした時、私の頭の中には、何人もの人たちの悲哀に満ちた顔が浮かんできました。あなたたち二人のあの真剣で悲しみと怒りが織り交ざった顔も浮かんできて、そして私に言うのです。

「人が人を傷つける差別を見逃すな。絶対に許すなよ。お前にできることは、差別を真になくしていく教育をやり続けること。差別をなくすことは、誰が何と言おうと正しいこと。その勇気と信念をもって教育に当たれ。俺たち二人が見てるぞ。」と、喝を入れてもらった気がしました。

ありがとう、ツヨシとサトシ。校区の人たちと力を合わせて頑張るよ。それが、あなたたち二人と頑張ることになると信じています。